

# Nothingness as the Complement of the Totality

藤川直也 Naoya Fujikawa  
首都大学東京

無に関するパラドクスの一つは、無は（無であるがゆえに）いかなるものでもないにもかかわらず、それをものとして扱わざるをえない、というものである。たとえばハイデガーは「形而上学とは何か？」において、無について問うことにまつわる困難、とりわけ、無について問うこと自体が、無をあるものにしてしまう、という困難について論じている。あるいは西田ら京都学派の哲学者たちは、無はものでもないが、しかしものでもあるという矛盾する特徴をもつことを、無の基本的な特徴と考えてきた。ものではないはずの無が、いわばもの化してしまうという問題は、もの（あるいはいくぶんかたい言い方をすれば、対象）についてのマイノング主義的な想定、すなわち、思考可能なものはすべてものであるという想定（ハイデガーや西田はこの想定を採用していたと見なしうる）からの帰結と考えられる。私たちは、無について考えることができる—たとえば、無はものではない。そしてこうした思考が可能である限り、目下のマイノング主義的な想定によれば、無はものである。

矛盾する対象をどのようにして扱うかということは、ラッセルのマイノング批判以来、マイノング主義にとっての重要課題の一つであった。この問題に対する対応を、ここでは次の二つに区別したい。一つは無矛盾的アプローチ (the consistent approach) と呼べるもので、四角くない四角 (the nonsquare square) のような一見したところ矛盾した対象は、実は本当は矛盾していない、と論じるものである (たとえば Parsons, 1980)。もう一つは矛盾許容的アプローチ (the paraconsistent approach) ないし真矛盾主義的アプローチ (the dialetheic approach) と呼べるもので、こうした対象は実際に矛盾しているということを認めた上で、トリビアリティを回避するために、矛盾許容論理を基礎論理とする、というものである。

無の問題に対する無矛盾的アプローチに、Jacquette (2013) がある。そこでは無は、志向可能である (being intendable) という性質をもち、(他に) いかなる構成的性質 (これはパーソンズの理論における核性質に相当する) ももたないものであるとされる。本発表ではまず、Jacquette (2013) の提案は、無のものではないという特徴を捉えそこなっていると論じる。その上で、無が矛盾した性質をもつということを額面通りに受け取る矛盾許容的アプローチを追求したい。ここではそうした試みの一つとして、Weber and Contoir (2015) における矛盾許容論理上のメレオロジーに基づいたアプローチを提案する。無を特徴づける一つの仕方は、無とはすべてのものの欠如/不在 (あるいは、あらゆるものを取り去ったあとに残るもの) である、というものである。本発表では、こうした特徴づけをもとに、無を、あらゆる対象のメレオロジー的和の補と考える。本発表では、あらゆる対象のメレオロジー的和の補は、ものでありかつものではない、という矛盾する性質をもつということを論じた上で、そうした補

をメレオロジーに組み込むことに対する二つの反論に応答する。その反論の一つは、そうした補は、トリビアリティを帰結するというものであり、もう一つは、そうした補は、ただ一つの対象だけがあるという一元論を帰結するというものである。さらに時間が許せば、すべての対象のメレオロジー的和の補としての無を、Priest (2014) が提案する、空集合の要素のメレオロジー的和としての無と比較したい。

なお、本発表は、Filippo Casati 氏 (University of St Andrews) との共同研究に基づく。

## 参考文献

- [1] Jacquette, D. (2013). ‘About Nothing’, *Humana Mente*, 25, 95–118.
- [2] Parsons, T. (1980). *Nonexistent Objects*, New Haven: Yale University Press.
- [3] Priest, G. (2014). ‘Much Ado about Nothing’, *Australasian Journal of Logic*, 11:2, 146–158.
- [4] Sylvan, R. (1995). ‘Re-Exploring Item Theory: Object-Theory Liberalized, Pluralized, and Simplified but Comprehensivized’, *Gratzer Philosophische Studien*, 50, 47-85.
- [5] Weber, Z. and Cotnoir, A. (2015). ‘Inconsistent Boundaries’, *Synthese*, 192, 1267–1294.